

兵隊長がルマン人オトアケルによつて、最後の皇帝ロムルスニアウグスツルスが廢されて滅亡した。ローマを興したものは堅実な農民であり、亡びたものは墮落した同じ農民であつた。

我が國に於いて、兵農全く分れたのは豊臣秀吉の刀狩り以後である。それ以前は武士といつても、平時は土着して土地を耕す農兵がその主体をなしていたものである。源頼朝の覇業を支えたものは関東の農民兵であり、同じ時代に緒方三郎惟宗は豊後の農民兵を率いて、源平の争覇に一役を買つたわけである。

我が郷土に於いても佐伯氏の統治した時代は、兵農未だ分れない農民兵の時代であつた。惟定は堅田合戦の際に、大坂本、番五川原、中野口の守備に派遣した兵員千八十余、堅田に差向けたもの千八百余、城中に若干の守備兵を止めたであらうから、凡そ三千余名を動員している。これは当時の人口から考へて大変な人数である。屈強な農民は全部動員されたと考へてよからう。堅田合戦以後の各地の征戦に於ける赫赫たる戦果は、皆この農民兵の活動によるものである。

毛利氏の時代は兵農すべに分れて、農民は左迫され搾取される哀れな存在であつた。二万石の上納が如何に苛酷なものであつたか、想像に余りある。しかし人間の忍耐には限度がある。文化九年(一八一三年)正月の百姓一揆は、農民の不平等の爆発であつたが、毛利藩政をゆるかす程の大事件にはならなかつた。

明治維新は薩長の軽輩の武士が中心となつて遂行されたものであるが、彼等は氷山の一角であつて、徳川幕府を倒し封建制度を打破した眞の原動力は、農民を中心とした大衆の、自由と平等を求める朝の守せる様を迫力て

あつた。

太平洋戦争は軍閥におどらされた空しい戦であつた。これは長く國民に反骨の資料を供するものであるが、之を契機に多くの植民地が独立を達成したことは、東洋の歴史に大きな歩みを残すものである。又日本國民大衆のエネルギーの可能と限界を示す好資料として深く味うべきである。

以上いくつかの事例を見て来た様に、時代を動かす新しい時代を創るものは、いづれも大衆の力である。明治以来未だ百年、今日の大衆の動きがどんな歴史を創るか、それは後世の史家を待たねば判明しないことであるが、各人が歴史の二齣を刻み一つあると信じて、充實した一日一日を送りたい。そして佐伯史談会も、この歴史を動かす大衆の一翼として、益々会の充實を計り堅実な歩みを続けたいものである。(へむわり)

毛利神社の例祭に参列して 羽柴 弘

二月十六日午前九時から、住吉御殿を遷拜所として執行された毛利神社の今年の例祭に、高水会長河野会長と参列したが、いささか感じたことを述べたい。

藩祖高政公は何と云つても佐伯兩市の大恩人、歴代藩主或は治政に或は文教にそれぐ領民を撫育し善政を施している。今日の佐伯市の隆盛している姿を見ればつけ、三百六十九年に亘る藩政、いや更に州政に及んで、毛利氏とわが佐伯のつながりはまことに厚く、そしてそれは今もつぎ今もつぎ、その親密なつながりを思えば、集う市民の数も少く(大多数)市民は、この例祭をやらざるべからう。いささかさみしい思いに打たれる。矢筈会唯一の行事のような格好であるが、毛利氏と佐伯のつながりに興味をもち、藩政時代の歴史を追求している人々、一般市民と毛利神社につながる例祭としたい。

三の丸の一角に、小さくてもよい、毛利神社の社殿を復興造営が望ましい。その早期実現を見るには、気運醸成とは分りなからず、はなからい、一歩